

特集
「忘却」のメカニズム

民族の「記憶」と「忘却」

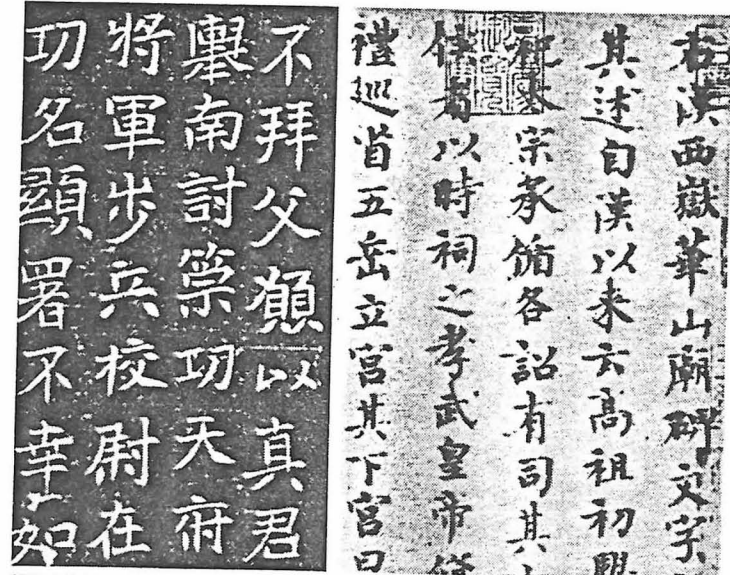
東京工業大学工学部助教授
橋爪大三郎

はしづめ・だいさぶろう 1948年神奈川県生まれ。東京大学文学部社会学科卒業後、同大学大学院博士課程(社会学専攻)単位取得後退学。89年より現職。「現代思想はいま何を考えればよいのか」「冒険としての社会学」「はじめての構造主義」などの著書があり、近著に「民主主義は最高の政治制度である。」がある。

社会にも忘却のメカニズムがある

ものごとを記憶したり忘れたりするのは、人間の頭脳の生理的なメカニズムです。これは、個々人の頭のなかで起こる。いっぽう、社会にもこれと似たようなプロセスがあります。それは当然、個々人の記憶と忘却のメカニズムにもとづいています。けれど、個人の忘却のメカニズムと、社会

のそれとは違うんです。ある個人が記憶しているのは、その人が忘れたくない、大事なことですよね。でもそれも、その人が死ねば消えてしまう。そうしたら、社会としては、それを忘却したことになるんです。人間はつきつき死にますから、社会全体が、大きな忘却のメカニズムであるとも言える。そこで社会は、特別な記憶のメカニズムを考えた。ある個人の記憶を、別な個人の記憶に接続するというテクニクです。これが伝



銅器や石碑などに刻まれたり、鋳出されたりした文字を総して金石文という。中国などでは、事件を永遠に記念するために、後代まで金石文が盛んに行なわれていた。左は東魏、右は漢の時代の金石文。

承。鸚鵡がえしによって、人びとの古い記憶を覚えこんで、次代に伝えていく。ただしこの方法だと、人びと誰もが価値があると思うことしか、記憶によって伝えられません。そこで現れたもうひとつのテクニクが、文字です。これによって、社会の記憶は、個人

人の記憶から切り離されて、記録とよべるものになった。人間は、文字によってさまざまなことがらを記録し、文明を築いた。こうして、記録しなかったり、記録しても注意を払わなかったりすることが、社会にとっての忘却を意味することになりました。

歴史は、忘却をめぐる民族の力学の産物

文字の時代は、歴史の時代です。歴史は文字があることと、定義上同じことなのです。ごく初期の文字の役割は、三つぐらいあり

ました。第一に、税金の額を数字で記して、ごまかしを防ぐこと。第二に、証文を作った裁判の証拠にすること。どちらも、時間が経ってあいまいになっては困ることを、記録するのが目的です。でもこうした記録は、いっぽうに有利なことがもういっぽうには不利になる関係ですから、事情が変化すると消されてしまいます。絶対の権威をもつことはできません。それに対し、第三のもの——歴史——は、

圧倒的な権威を持ちます。なぜかと言うと、それはある民族が、自分たちの正統性を主張するために編んだ記録だからです。自分たちがこの土地に住んでいるのは正しい。いまの王を戴いているのも正しい。別の民族と戦って勝利したことや、英雄、政治家などの業績を記す。それが歴史です。歴史は、その民族のアイデンティティを与えます。

歴史に関心をもつ人びとは、当然ですが、民族紛争の多発した地域の民族です。たとえば中国人。たとえば古代ローマ人。たとえばユダヤ人。みなそういう民族です。というのは、歴史の書物に書き記されなかったことは、なかったことになる。忘れてしまえる。自分たちに都合の悪いことを、書かないですませることもできる。ある民族の歴史は、別の民族からみれば、集団的な忘却の巧妙な仕掛け、ということになります。

いっぽう、歴史に興味を示さない民族もある。文字を持っていくせに歴史を書かない典型はインド人。私の理解では、これは彼らのカースト制と関係がある。昔アーリア民族がインドにやってきて、先住民族を征服し、自分たちがバラモンやクシャトリアといった上位のカーストに収まった。先住民族を底辺のカーストに押し込めた。そんなことを日々意識させられては、安心できない。そこで、歴史を書くことを抑止し、世界は永遠に循環

周の滅亡後、中国は東周時代と呼ばれる軍事的・政治的動乱期が500年も続くことになる。左図はその頃の勢力分布図。その後、秦の始皇帝によって中国全土は統一されるが、永続することはできなかった。下は刺客が始皇帝を襲う図。



するというイデオロギー（輪廻説）を生み出したのです。これは彼らの、忘却のメカニズムです。そしてここから、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教も生まれました。
そして日本。島国で気候もよい土地で、のんびり育った日本人は、世界でもめずらしい民族紛争音痴です。右を向いても左を向いても日本人。腹を割って話せば、問題は解決すると信じている。

なんでも相談して決めたことにしないと気がすまない日本人は、歴史にこだわりません。事実が事実として決まっていたのでは、相談の余地がないから具合が悪い。なにが事実かは、問題が起こったそのつど、適当に相談して決める。こういうやり方では、体系的な歴史は書けません。古事記や日本書紀を、中国の真似をして作ってみたけど、後がなかなか続かない。日本人は、文字が大好きなんだけど、その使い方が感覚的で、俳句や私小説みたいなものばかり書いています。みんなが信頼して読める正しいテキスト（歴史や哲学）を生み出そうという精神が、薄弱なのです。

記録のメリット、デメリット

こんなふうに記録には、利害対立が絡みまです。誰かが自分に都合がいいので記録するのですが、それが別の誰かには都合悪かったりする。歴史にも、この両面がある。おのおの

の民族が歴史にこだわるおかげで、過去のいまわしい出来事が呼び起こされ、対立が深まったりする。

情報化の進んだこの時代、記録はますます不可欠です。歴史を忘れてしまえば、民族紛争は起こらない——そんな世界は単純じゃありません。人類は、過去を残らず忘れ去るわけにはいきません。過去を失えば、現在もなくなってしまうのです。

過去から受けるメリットと、デメリットについて考えてみましょう。
まずその大きさを比べれば、メリットのほうが大きいと言える。その最たるものは、過去の文化遺産。特に現在では、科学技術の恩恵をあげるべきです。科学技術が長足の進歩をとげるようになった裏には、コンピュータの進歩により、過去のデータを自由に使いこなせるようになったことがある。図書館も、社会のすぐれた記憶装置だと言ってよい。

デメリットとしては、人びとが過去に縛られすぎること。たとえば、歴史教育を考えると、過去の出来事を覚えるように強いるわけです。これが時に問題の種になる。

中国や韓国の歴史教育は、民族のアイデンティティを確立することがテーマです。侵略した国を非難することが直接の目的ではなく、それをねのけた民族の誇りが、自分た

に犯した過ちは、現在記憶しなければならぬ大事なことです。しかし、そのことばかりを後ろ向きに考えていたのでは、将来の価値観は出てきません。社会的な記憶／忘却をうまく操れるかどうかは、価値観、生き方、思想の問題なのです。

そこで、まずひとつのスタイルとして大事なものは、誰かが事実として大事に覚えていることを否定してはいけません。事実はずべて事実として認める、ということなのです。

事実を事実として認めない（故意に忘れようとする）とどうなるか。その事実を知っている人が現れただけで、それまでの価値観がひっくり返ってしまうんです。けれど、そういう事実を元々わかまえていれば、そういう事実がこだわる人が現れても自分の価値観はひっくり返らない。強さが違います。重要な事実には目配りし、なにが大事かはそのあと自分で決めることが大事なのです。

いまの日本には、アメリカには結局かなわなかったとか、経済は発展したけど文化の面は大したことないとか、外国に思われているんじゃないとか、集合的なコンプレックスがあるために、特定の事実を、目を向けられない。目を向けていなくても、不安ですから、やはり気になっていて、結局そこから先へ進めない。意識のトラウマになっているんです。トラウマとは、忘れようという意識はあっても、

ちの国家の出発点になっているのです。歴史を忘れることでは何も解決しない——これが彼らの言い分です。理屈が通っている。

日本人は、過去にこだわらなければ、問題は解決すると錯覚しがちだ。けれども、相手を侵略した当事者（の子孫）が、「歴史をきちんと記録しすぎると民族間のわかまりが大きくなるので、水に流して仲よくしまししょう」とみたいことを言ったら、ますます問題が大きくなるだろう。

では、こういったことを十分に踏まえ、しかも争いにならないかたちで解決をはかるには、どうしたらいいか。

文字にしても、そのほかの情報にしても、記録のメカニズムは技術の進歩とともにどんどん発達していくから、それを破壊したり消してしまったりするのはできない相談だ。それをわきまえるならば、解決は、知っているけど、気にしない、覚えているけど、こだわらない、という態度にしかない。この態度こそ、単に忘れていく（覚えていない）というのと違った、高度な段階の賢明な「忘却」だと言えるのではないだろうか。

忘れることは、覚えることか？

よく考えてみれば、記憶と忘却は、同じコインの表裏だ。情報が保存され、記憶されていけば、それは記憶です。そして人間は、す

忘

べてを記憶することはできない。ある事実を記憶しているということは、それ以外の事実を記憶していないということでもある。つまり、記憶とは、情報の選択なんです。そこで、忘れる技術と覚える技術とは、一絡げということになる。きちんと忘れることができるれば、きちんと覚えることができる（逆もまたしかり）。そして、これがうまくいくためには、記憶するにも忘却するにも、情報選択の規準となる価値観がはっきりしていないといけない。中途半端はだめなのです。

人間にとって幸せなのは、大事なことはきちんと覚えていて、どうでもよいことは忘れることでしょうか。でも、大事なことは忘れるのも、どうでもよいことや嫌なことばかり覚えているのが、人の常です。でも、嫌なことだから忘れようと思っても、そうはいかない。過去に縛られているからです。自分には何が大事か、現在ではなく、未来に立脚した価値観を持ってれば、過去の束縛を逃れることができるかもしれない。

そこで、さきほどの歴史の問題に戻ってみましょう。

次の世紀、来るべき未来に、どのような実りある人間関係（民族の関係でもいいです）を築けるかということ、いま十分に考えることができなければ、いま何を記憶し、何を忘れていいのか判断できません。日本が過去



図版引用 「古代中国5000年の旅」(日本放送出版協会)「画像が語る中国の古代」『世界大百科事典』(共に平凡社)

いや、あるからこそ、実は忘れようのない、心の傷です。

そういうときは、むしろ逆に、思い出したほうがいい。あえてそのことに、とことんこだわる。そうやって問題を解決すれば、もうどうでもよくなるものです。そのときはじめて、ほんとうにそのことを、忘れることができるのではないのでしょうか。



好きで選んだ「社会」の仕事 演劇部では貴重な体験

開成中・高から東大へ、東大大学院を経て、現在は東工大助教授と、一見エリート街道を歩んでこられたようにみえる橋爪大三郎先生。しかしそのガンバリ時代は、必ずしも優等生一直線ではない。体の弱かった小学生時代、極度に成績が落ち込んだり、遠距離通学に制約された中高時代。芝居にあげられ自分を見失いそうになった学園紛争下の大学生生活。その都度、マイナス要因を自らの糧に変えてきた先生のガンバリには見習うべき点が多い。今回は、社会学の若手旗手、橋爪大三郎先生に学生時代の思い出と職業選択を中心に、研究者のあり方や「専門の学問などについてもお聞きしてみた。

1993-13
3/15

橋爪大三郎先生に聞く

東京工業大学助教授・社会学者

誰でもそうだと思うけど、好きなことを仕事にしたいと思いた。——高校生の頃。一人前に思想書を読んだり、小説を書いていような連中と、しょっちゅう集まって、大まじめに議論してた。そんな、僕の原因ともいえる時代。でも、特に何がしたいという具体的なものがあったわけじゃない。で、国語、数学、理科、社会、って枠で考えたら、得意なのは国語と社会。ただし「国語」を仕事にしようと思ったら、小説家とか詩人とか、なんとなく浮き世離れして大変そうでしょ（笑）。でも、「社会」が仕事になるなんて思ってもみなかった。

棚の本も見たけれど、やっぱり社会学のほうがよかった。ちょうど日本にアメリカ流の社会学が輸入されて、根つき始めた時代。社会学の本を読んだら、執筆者のほとんどが東大の先生だったので、そこに行けば勉強ができると思い、東大の文Ⅲに進学。それが、出発点。といっても、大学の学生時代は、ほとんど授業なんて出席せずに終わってしまったけど（笑）。考えたんです。小学、中学、高校と、まあ今ほどじゃないにしても、受験、受験という環境の中で育って、受験以外のいろんなことを切り捨ててきた。でも、本当はその中にこそ、大事なものがあつたんじゃないか。それを取り戻すなら、たぶん今しかない、と。

かを表現するというのは、頭でわかっていることは、まったく別なんだってことを痛感させられて、モノの見方が変わりました。それと、お芝居というのは、いわば普通じゃない状態を人工的に作り出すものですから、逆にイヤというほど自分の癖や日常が自覚させられるんです。極限状態の人間がどんなものかわかれば、普通の状態の人間がどういふものかもわかる。社会学の研究にも、大いに通ずるところがありました。

プロフィール
はしづめだいきぶろう。
一九四八年生まれ。東京大学文学部社会学科卒業。同大学院博士課程修了。現在、東京工業大学工学部助教授。主な著書に「はじめの構造主義」(講談社現代新書)、「言語ゲームと社会理論—仏教の言説戦略—現代思想はいま何を考えればよいか?」(ともに勁草書房)。「冒険としての社会学Ⅰ」(毎日新聞社)。「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)などがある。

「私のガンバリ時代」十二月号著書プレゼント(福増龍夫さん)の当選者は、今月号の当選者発表と一緒に、五月号のこの欄で紹介させていただきます。

はしづめだいきぶろうの構造主義

橋爪大三郎先生の著書「はじめの構造主義」を五名の方にプレゼント。投稿用ハガキで申し込んでください。

小学時代
小学校のころは、普通の子でしたが、本を読んでいたんで、学校は面白くなかった。読んで知っていたことばかりだった。あまり体が丈夫じゃなくて、家で本を読む子でしたからね。

中学時代、成績が落ち込んで、中三の夏休み前から心を入れ替えましてね。今までやらなかった予習をやるようになりました。それまで、学校で習ってから勉強すればいいものだと思っていたんですよ。それじゃ間に合わないってことがわかった。授業を受ける前に英語の単語を調べると、くらはやっていたんですけど、他のことは何もやってなかった。予習すると、効果ありますよ。まず授業がよくわかるでしょ。問題も全部解いてあるから、三回、四回習うのと同じですから。通学時間の関係でどんなに頑張っても家で机の前に座ってられる時間が三時間半だったんですね。その時間全部、勉強できるわけないですから。そうすると後の時間はどうしようかという、帰りの電車のなかで理科や社会学の復習をして、行きは英語とかね。それで、何年かかかって取り戻しました。

1993-13-4/15

特集
社会科学
入門

自由に制度を変えたり作ったり していける時代が やってこようとしている。 今こそ社会科学を 選んで損はない。



インタビュー
橋爪大三郎

答えも問いも自分でみつける
それが社会科学だ！

Q 高校までの社会科学の勉強と、大学で学ぶ社会科学はどのように違うのでしょうか。

高校までの勉強は、はっきりいうと受験勉強でした。受験勉強と大学での勉強は、根本的に違います。あらかじめ答えのある問題を勉強する、これが高校まで。大学の勉強は、答えはないけれども問題がある、なんてことがたくさんある。社会科学にかぎらず、自然科学もそうなんです。

社会科学には教科書があったでしょ。教科書を覚えて答えるのが勉強だった。社会科学はそうではない。

ただ、社会科学の中でも教科書みたいなものがある分野もあります。たとえば経済学。いちおう基本的なものの考えかたが決まっています、それをいろいろ応用していくわけ。

いっぽう社会科学には、そういった教科書はない。世の中のこと、なんでも社会科学の問題になってしまいますから。経済学にしても、教科書だけ見てれば良いというものではありません。答えは自分でみつける、はなはだしい場合には問題も自分でみつける、これが社会科学を学ぶということなんです。

だけど、問題も答えも自分でみつけろといわれなくても、雲をつかむようですよ。そこを自分でみつけて、次の三つの点に注意して勉強していけばよいでしょうね。

一つは、古典を読むということ。道なき道を歩いて、自分で問題を考え、自分で解答をみつけていった先人たちがいるわけです。彼らの書いたもの(古典)を読んでいくこと。先人のオリジナルな業績に直接あたるといえることは、高校生まではやっていないはず。教科書に書いてある有名な本の名前くらいは知っているかもしれないけど、大学に入ったら、自分で直接読むこと。大学の図書館に行けば本はごろごろあるからね。

二番目は、理論を学ぶということ。たとえば、ニュートンの本を見れば、質量とか加速度とかが定義してあって、それを理解し、さらに微分とかも勉強すると物体の運動がわかる。理論を理解すれば、物理学がわかったことになるのです。理論がわからなければ、物理学はわからない。同じように、社会科学にだっていくつか理論があるわけです。それをマスターする、ということをやらずにやらなきゃいけない。

高校までは、理論の結果をかみくだいて教えてくれただけで、全部を一から組み立ててはいないんですよ。大学では、一から組み立てて全部理解しなきゃいけない。本物の理論を自分の頭の中に組み立てる、それが二番目。

三番目は、技術を身につけるということ。専門家になろうとする人なら、その道で生きていける技術を身につけなきゃならない。たとえば物理学や化学をやろうという人なら、実験ができるようにならなければダメでしょ。薬品を買ってきて、教科書に載っている反応を自分で起こさなきゃ。それができてはじめて製薬会社とかに就職できるわけ。商学部だったら、簿記をやったり財務表が読めるようにならなきゃダメ。法学部だったら法律がわからなきゃ。

社会科学などには、調査というのがあります。アンケートを配って集計して、コンピューターにかけて分析する。これを一度キッチンと自分でやってみる。そういうのをマスターして、専門家としての力をつけていくわけ。

そういう二つの点をおさえなきゃいけないところが、高校までの社会科学と、社会科学の違いですね。みんな試験を解くための勉強しかしてこなかったわけだから、ちょっとやりかたが違ってもまどう人もいるかもしれない。正解がある問題を解くのがうまいからといって、大学での勉強がうまくいくとはかぎりませんよ。必要とされるのは別の才能ですから。ハッキリいうと全然関係ないんだ。だから高校の試験の点数があんまりパッとしなかった人にこそ、大学で伸びるチャンスがあるんです。

はしづめ だいさぶろう

1948年神奈川県生まれ。1977年、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授。著書に「言語ゲームと社会理論」(勁草書房)「はじめての構造主義」(講談社現代新書)「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)「現代思想は何を考えればよいのか」(勁草書房)「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)「社会がわかる本」(講談社)「僕の憲法草案」(共著・径書房)などがある。

社会法則と自然法則の 違いをおさえておこう

Q 社会科学の成り立ちについて最低限おさえておくべきポイントを教えてください。

まず、自然科学と社会科学を比べてみます。ある現象の法則性を説明しよう、できれば結果を事前に予測して人類の幸せに役立てようというのは共通。どちらも法則性を取り出すことを目的にする。じゃあ、違いはどこにあるかというと、自然現象の法則性というのは、人間が決めたんじゃないわけ。はじめからそうなっているものであって、何回実験しても結果は変わらない。

それに対して、社会現象の法則性は歴史のなみのなんです。歴史的だというのは、要するに「変わったっちゃう」ということ。時代によっても、社会によっても違っちゃう。普通、変わらないものを法則というはずだから、なんだかおかしいでしょ。たとえば、経済学の市場法則。「需要が多いと物の値段が上がる」というヤツね。こういう市場法則は、よく考えると大昔からあったわけじゃない。ここ二百年くらい、資本主義社会の中で、はつきり成り立つようになった法則なわけですね。しかも、今だって世界中どこでも通用しているわけじゃない。社会科学の法則というのは、あくまで

歴史的・文化的なものなんです。

歴史的・文化的な法則というのは、言葉を変えていうと、実は制度なんです。つまり、人間が決めたものなんだ。直接、法則を決めるわけじゃないですけど、みんなこういふふうにしなすようにと決めると、何らかの法則ができてくる。たとえば、みんなが財産を持っていて、労働力は自由に売ってよい、銀行はお金を貸してくれる……ということを制度として決めると、資本主義社会の市場法則が自然にできちゃったということなんです。

社会法則が成り立つ前提に、必ず制度がある。たとえば、資本主義ってどうやってきたのか。日本人が作ったものじゃないですね。日本人は真似ただけだ。作ったのはヨーロッパ人です。イスラム教徒も、ヒンズー教徒も、儒教徒も作らなかったのに、ヨーロッパのキリスト教徒だけが資本主義を作ったわけ。だったら、資本主義の出发点にはヨーロッパの文化的な伝統があるはずだ。そこまでわかっておかないと、いきなり資本主義をロシアでやろうとして全然うまくいってない理由がわからない。あるいは、中国では政治は民主化してないけど、経済は発展している、なぜだろう？ そういう応用問題が解けなくなっちゃうんですね。だから、社会現象の法則性を研究する場合には、その法則性の根っこに制度（あるいは文化）があるということをおさえておかなきゃいけません。

バランスのとれた社会常識と、 問題を理解し説明する能力、 それをしっかり身につける。



それぞれの学問に それぞれの適性

Q 社会科学と一言でいっても、中身は法学・政治学・経済学・社会学とわかれていきます。なぜ、そういうふうに分かれてきたのですか。

社会科学は、今から二百年前くらいにヨーロッパに作られた市民社会と一緒にできあがったものなわけです。市民社会はどういう約束ごとでできている社会かというところ、一番根本にあるのは自由ということなんです。いったい何が自由なのかというところ、個人が考えや行動が自由なんです。何を考えてもいいし、どう行動してもよい。そういう前提ではじまる社会が市民社会。これだと個人にとってたいへん都合がいいですね。

でも、そこに大きな問題があります。みんなが自由だったら、みんなバラバラに無秩序になって社会が解体しちゃうんじゃないか。伝統的な社会では一人ひとり非常に不自由です。お父さんが大工だったら息子も大工とか、いろいろなシキタリてがなじがらめ。個人は不自由なんだけど、社会全体はうまくいくに決まっている。でも、自由な市民社会のほうは、うまくいく保証がない。それでもなんとかうまくいく、というのは不思議だ。

市民社会は自由なはずだけど、 今まではちっとも 自由じゃなかったでしょ。



そこでよく考えてみると、法律というのがあ。個人は自由なんだけど、法律は守んなきゃいけない。行動の規準というものが、あらかじめ法律というかたちで書き込まれているんですね。だから市民社会では、自由と秩序が両立するようになっているわけです。

法律があっても、それがただの空手形になったんじゃないから、その法律を実行に移して、実際に政治を行なう主体が必要になります。それが政府です。そして、法律を守るかぎり、個人や企業は自由に活動して金をもうけていい。

市民社会はそういうふうには、法律・政治・経済というのがそれぞれ独立して動くという約束でできています。だから法学、政治学、経済学という学問もそれぞれ独立に存在しているのです。ただ、サッカーにもこぼれ玉を拾うスイーパーという選手がいるけど、それと同じで、そういうふうにはキチッと学問をわけちゃうとこぼれ玉がけっこう出てしまいます。それを始末する「何でも屋」の学問が社会科学ということになるでしょう。同じ社会科学とはいっても、それぞれの学問には適性があると思います。

たとえば法学だと、法律的な考えかたのできる人じゃないとなかなか実にならない。法律は条文なんです。条文だけ理解してもダメなんです。条文を条文として読むのではなく、そこに「横暴な大家さんが、間借り人を追い出そうとしている

けど、間借り人のほうも家賃を滞納してたりする、さでどうしたらいいのかな」という具体的な状況を読み取って真剣に考えちゃう人、そういう人が法学に向いているわけ。自分には直接関係ないけどAさんとBさんがすごくモメちゃってる場合、どうしたらいいんだろうって親身になって考えることのできるタイプ。「どうでもいいじゃん」なんて思っちゃったら法律なんて勉強できない(笑)。経済やりたい人なら、多少は数学ができないとダメ。大学に入ってから、さらに数学の勉強を続けるくらいは気持ちでいてちよいどいい。経済学部志望の人は、「文系だから数学やらなくていいや」とは間違っても思わないこと。実際には数学があまりできなくても、そういう覚悟がちゃんとあれば何とかかなります。

それから社会学の場合は、人間に対する雑学的な興味、好奇心が必要。でもそれだけだとちよつとオタクになっちゃうから、もう少し冷静に物事をゆつくり考えるタイプの人がいいかな。

人文科学と社会科学は いったいどこが違うの？

Q 文系の学問は一般に、社会科学(法律・政治・経済・社会など)と人文科学(哲学・文学・歴史・心理学など)にわけられていますよね。人文と社会とは、どう違うのでしょうか。

人文と社会をあまり厳密にわけて考える必要は全然ないと思う。ただ、強いていうと、「人間に対する興味」と「社会に対する興味」は微妙に違います。

人文科学というのは、人間一人ひとりの違いにこだわる。文学ってそうですね。一人ひとり違わなければ文学なんて必要ない。作家が違い、登場人物が違い、読者が違い、一人ひとりの感受性が違うから、文学や芸術に意味がある。心理学とかにしても、個性とかパーソナリティというのが大きな意味を持っています。文学から心理学まで、人間一人ひとりの違いが問題になる学問が人文系の学問だといえるでしょう。

それに対し、社会科学のほうは、一人ひとりはもちろん違うんだけどそれはおいといて、どんな人間でも最低限こんな行動をするんじゃないか、という共通項でくくっていく。法律なんかそうですね。Aさんが泥棒してもBさんが泥棒しても同じだという見かたで法律はできている。文学だったら、Aさんの泥棒とBさんの泥棒はこんなに違うってなことを考えるわけだ。Aさんが人の物を盗んだ動機は非常に深いが、Bさんのやった盗みは浅いから、とか(笑)。

結局ね、一人ひとりの違いに着目するという点と、共通項でくくっていくこと、これは両方必要なんです。前者だけだったら、なんの法則性もみつけれないでゴチャゴチャなままですよ。

政治が変わるとは、どういうことか。今まで議論だけはされてきたけど、みんな諦めていたようなさまざまな権利要求がどんどん出てくるということなんです。今までの政治は、地方で橋を通すとか、米価がどうだとか、中小企業に金をよこせとか、そういった要求だけで動いてきた。都会のサラリーマンや、その予備軍である大学生たちの権利主張が通ったことはほとんどない。でも、これからはそうではなくなる。

戦後五〇年間、日本を作っているシステムの大枠は動かないことが前提でした。平和憲法は絶対、自民党政権も絶対、全部ガチガチに決まってる動きようがなかった。でも、これからは動くようになりそうです。ということは、われわれが日本の社会制度を作っている時代になるということ。法学部の人たちは、ただ法律を解釈しているだけじゃなくて、法律を作ればいい。経済学部・経営学部の人たちは自分たちで会社を作ればいい。社会学の人たちだって、新しくいろんな問題をみつければそれを解決していける時代になる。大きなフロンティアが広がってくるということです。

自由な市民社会というのは、今まで絵に描いた餅だった。今からは、自由が自分たちの手の中に入ってきます。自由に制度を変えたり作ったりしていける時代がやっつとこようとしているわけですね。今こそ社会科学を選んで損はないというところなんです。

逆に後者だけだったら、一人ひとりの違いを考えないから実に荒っぽい議論になっちゃう。だから、社会科学をやるにしろ人文科学をやるにしろ、両方の視点が必要。バランスが大事ですね。かたっぽうに全然興味がないというのなら、学問をするのはちよつとやめたほうがいいかも(笑)。

今、社会科学を志す意義

Q 今の時代に、社会科学を学ぶ意義とは何でしょうか。

私が思うに、近代以降の日本は、三つの時期にわかれると思います。第一の時期は一八六八年から一九四五年まで。第二の時期は一九四五年から一九九〇年まで。そして第三の時期は一九九〇年から、つまり今始まったばかりなのです。

第一の時期は、ヨーロッパと日本のあまりの違いにあわせて、いろいろと日本人らしくないことをやった時代。まず強力な中央集権国家を作って、天皇は神であるみたいな無茶をいう。あげくのはてには「ほしがりません勝つまでは」をスローガンに、タクアンのしっぽをかじりながら戦艦大和を造ったり、無理に背伸びをしてがんばった時代。これは専門用語でいうと、開発独裁といって、イラクのフセイン大統領の政治体制と同じです。世界中で起こったことが日本でも起こったわけ。

社会科が好きだったので、
名前の似ている
社会学を選んだわけです(笑)。



僕の憲法草案 橋爪大三郎さん

撮影・野武昭宏

この本は、リレートークという形をとっている。まず初めに橋爪さんが憲法について語り、それを受けて景山民夫さん、さらに鈴木邦男さん、伊藤成彦さんと、多彩な顔ぶれが前の人の話を受けて各々勝手に意見を述べる。それがまたまわりして、最後に呉智英さんが全体の感想を述べて終わっている。「本を作っているときは、ほかの人に全く会っていません。いっしょに討議して憲法草案を作ろうというのではないんです」

あえて言えば、それぞれの人もなにも独自に憲法草案を作ろうとしているわけではない。今の憲法についてどう思うか、改正すべきか、改正するならば何を改正したかを、ある意味では、ブライベートに「言っているだけ」。

「私がいちばん強調したいのは、

憲法はお御奥みだいにみんな支えるもの。だからみんな議論すること自体に意味があるんです。

憲法はタブーではないということなんです。憲法を守るということは、自分たちの作った憲法を守るということでしょう。なのに、日本国憲法の成り立ちやいろいろな事情で、この憲法が自分たちのものだという実感が乏しいんですよ。憲法というものがあらし、みたいな感じ」

憲法草案なんて素人にはつくれない。けれども、憲法について議論すること自体には意味がある。憲法に実感がわいてくるからだ。「日本人ってお上意識があるから法律のご厄介にはなりたくないとかって思っているでしょう。そんなふうにし法を考えてはいない。たとえばアメリカは、いろいろな人が集まってできた国ですね。どんな人がいるのかよくわからない。だから法律しか頼れないとい

う面があるんです」

ヨーロッパでも、人間のアイデンティティは宗教や憲法や国家やさまざま、いろんなサイズの間で塊が重層している。でも日本人のアイデンティティは、ただひとつ、日本。離れ小島のように世界の趨勢から切り離され、「文化としての日本」が生きている。だから憲法の必要性が実感できない。では、憲法はいらぬのかと言えば、この国際社会でそんなことはありえない。在日外国人も増えてくるのだし、このままではいっかがない。現にいろいろ問題が出てきているではないか。

「憲法というのはお御奥みだいなもので、みんな支えるもの。イデオロギーの違いはあるけれど、コンセンサスを見つけていけばいいんですから」



撮影・千田彩子

「ほかの人の意見を代表することはできませんけど」と断わってから、インタビューに応じてくれた。まったく土俵の外人たちともけつこう話ができなかった。今年の秋、身体・性・制度をテーマにした著作集を出版 勁草書房の千定

極論 憲法なんて、いらぬ!

すべての憲法は、キリスト教徒の発明品である!

橋爪大三郎 [東京工業大学助教授]

どんなに素晴らしい憲法だって、それは「人類普遍の理念」なんかではない。日本人にとって憲法が「こーでもいい」のは、憲法という考えが、もともとヨーロッパの特殊な地理的・宗教的状況の産物だからだ!

—— 最近PKOや国会議員の定数は正とかいろいろあって、また憲法論議が出てきてますが、どうも僕には改憲派も護憲派もなんであんなに一生懸命に主張してるのかわからないんですよ。どっちの派も、なんだかんだ言っても結局「憲法は大事」ってところは一一致してるわけですよ。でも、たいいていの人は「憲法なんてどうでもいいじゃん」というのが本音だと思うんです。というのには僕の思い込みで、世間の人はもっとマジメに憲法について考えてるのかも知れませんが、そこいらのオッサンが天下

国家を論じる姿というのはどうもウソくさい。日常の生活には、刑法とか民法と違って関わってきませんからね。もしかすると憲法なんかあってもなくてもいいんじゃないでしょうか?

憲法は日常生活と関係なくて当たり前前

—— 刑法とか皇室典範とか国会法とか個別の法律さえきちんとしとけば充分じゃないのかと思うんです。憲法があっても自民党は汚職するし、差別もなくならないんだ

し。だいいち昔は刑法とかはあっても憲法なんてなかったじゃないですか。

橋爪 刑法があったっていうけど、刑法って言ってもね、近代刑法とそうじゃない刑法とがあるんです。たとえば、江戸時代の裁判ってどんなでした?

—— 時代劇見てると、大岡越前みたいなお奉行様が、その場その場の状況に応じて刑罰を決めますね。

橋爪 いちおう法律はあるんだけど、法律の条項に厳密に従わなくてもいいわけだ。それが大岡裁きならいいけど、お奉行様が

自分に都合のいい勝手に判決を下しちゃう場合もある。権力者が、人民を煮て喰おうと焼いて喰おうと勝手。これでは困るから法律の適用を厳格にしようという考え方が起こったんです。フランス革命のころの貴族でベッカーリアという人が『犯罪と刑罰』（岩波文庫）という本を書きました。なかなか泣かせる文章なんで、読んでみるといいけれど。そこで彼が縷々訴えているのは——それまでの刑法がいかにも加減であるか。王様に文句言う人や罪もない人を好き勝手に牢獄にぶちこんで、ろくろく証拠も調べないままいい加減な裁判をして首をちょんぎったり、なんていうことは日常茶飯事だった。こういう状態では、人々は安心して暮らせないし、王様に恨みを持つ人も出てくるだろうから王様にとっても都合が悪いのではないか。そこで、われわれは次のことを要求する。人間は誰でも生命、身体の安全の自由を持っている、だから、本人が法に触れないかぎりには、絶対にその安全を侵されることがない、と。そのためには、どういうことをした場合にどういう刑罰を科すかを、あらかじめ条文のなかに

書いておいて、それにあてはまらない場合には刑罰を科してはいけないことに決めよう——と提案したわけだ。これが「罪刑法定主義」といって、近代刑法の最大の特徴なのです。

——でも、権力側がそんな提案は守らないと言ったらそれまでですね。

橋爪 だから、その罪刑法定主義を、権力者に守らせるのが憲法なんです。個別の法律があればいいとあなたは言ったけど、その法律を守らせる法律が憲法。だから憲法は、庶民の日常生活に直接関わってこなくとも当たり前なんです。普段は個別の法律に従ってればいいわけ。ところがその背後に憲法がないと、法律はきちんと機能しない。権力者は好き勝手なことをするかもしれない。「権力者もまた法に従わなければならない」、「それが憲法の一根本にあるテーゼですね。言い換えれば「権力は合法的に行使されなければならない」。これは権力の近代化ですね。法は司法権力ですけど、それだけでなく、行政権力やいろいろな国家権力の全体を合法的に運営しましょうという考え、つまり法治国家を法治国家

たらしめているもの、それが「憲法」なんです。要するに憲法とは、「権力を野放しにしない」ために考え出されたものなんです。

憲法は「王との契約」だった

——すると権力側にとっては憲法はうっとおしいものですよ。

橋爪 そう。簡単に言うると、王様の権力の濫用に怒った人たちが、なんとか王様をコントロールする方法はないかと考えたものなんだから。

——それで憲法を発明した、と。

橋爪 いや、ゼロから発明したんじゃないで、大昔のことを思いだしたわけですよ。まず、その前にヨーロッパの王様たちがなぜ強い権力を握っていたのか説明します。そういう王国は、五世紀ごろにヨーロッパのあちこちに乱立したゲルマン人の国の果てです。当時、ローマ帝国はゲルマン人に圧倒されて、そのままと完全に消え去るかもしれない。そこで、ローマ帝国の国教だったキリスト教にゲルマンの

王様たちを改宗させて、彼らが王様であるのは神の意志によるものだとお墨付きを与えるシステムを考えついたわけですよ。するとローマ法王から王冠を授けられない者は王様として正統でないということになって、ローマはなんとか威信を保つことができた。いっぽう王様は、神と契約して王様になったんだから、神様の次くらいに偉い権力を持つ者だということになった。

——で、大昔のことというのは？

橋爪 ローマよりはるか昔、旧約聖書に書いてあるイスラエル王国のことなんですけど、そこにもやっぱり王様がいた。だけど最初の王は、あまりひどい政治をするので追放されてしまった。でもイスラエルはいくつもの部族に分かれているので、国をまとめる王様がいないと困る。そこで族長たちが相談して、ダビデという羊飼いを王様にするとという契約を結ぶことにしたんです。だからダビデ王と言えば正統な王、正しい権力者の代名詞だ。

——神でなく人と契約した王ですね。

橋爪 そう。この契約が、憲法というもののヒントになった。最初の憲法は、十三世

紀イギリスのマグナ・カルタ（大憲章）だと言われていますが、あれも王様と、それ以外の人々の関係を定めている。その頃の議会は貴族の集まりだったから、さっきの族長会議と同じようなものだ。で、ダビデの前の王様と同じで、あまり権力を濫用する王様は追放してやれ、と思ってる。だから議会が王様の行動をチェックできるような契約を、条文の形で取り決めたわけだ。要するに権力の骨格を法律で規定したわけだから、憲法の原型であり、立憲君主制のはじまりだと言える。

——でも、あくまで貴族と国王との関係ですね。

橋爪 だから、その後、資本主義が発達して貴族以外の人たちが豊かになり「市民」に成り上がると、王と貴族の契約だけじゃ都合が悪くなった。特にフランスじゃ王様が勝手に税金を上げて市民の経済を圧迫したから、権力者と一般国民との間にもきまりを作らなければならなくなった。だから、フランス革命のときの憲法は現代の憲法と似ている。国民が憲法を作ったわけだから、国民主権です。ここから「近代」という時

代が始まる。言い換えると「近代人」というのは、自分で憲法を作り、一人ひとりが国家の主体となる人間のことなんです。国家があると自由が増える？

——でも、それだと憲法というのは単に権力と国民の力関係をコントロールするだけのドライなものですよ。それだけならいいんですけど、たとえば日本国憲法とかには、人はこうあらねばならない、みたいなことまで書かれていますよね。なんでこんなことまで国に言われなきゃならないのって思うんですよ。

橋爪 「人間はもとも自由だ、その自由を守るためになぜ国家が必要なのか？ 国家なんかあったら自由がなくなるじゃないか」——これが典型的な日本人の考え方でしょ。ところがね、キリスト教徒は逆に、国家があると自由が増えるって考えるんです。

——？？？

橋爪 この理屈は、アメリカの憲法に即して考えるといいと思うけど、アメリカは、

そもそもどうやってできた国だったか？

—— ええと、イギリスからピューリタンとかが移民して……。

橋爪 そう。要するにまず、プロテスタントの中でも少数派の人たちがヨーロッパを捨てて移住した。なぜかというところ、キリスト教徒というのは非常に排他的で、違う信仰を持つ者に容赦しないからなんです。それでもローマ教会しかなかった頃は、イスラム教と闘っていけばよかったんだけど、宗教改革が起って、キリスト教にいくつもの宗派ができてしまった。そうなる、どの国の王様も自分のところの信仰こそが正しい、お前の信仰は間違っていると主張して、ヨーロッパ中、いたるところで宗教戦争になった。しかもそれが二百年か三百年続いた。これをなんとかするために、一六四八年にウェストファリア条約が結ばれた。君主の信仰と人民の信仰が一致すればよいということにして、国ごとに信仰が違っていてもいいという取り決めです。ところがこれだと君主と違う信仰を持つてる人もいるんだから、この人たちは国を出なければならぬ。しかも、なお悪いことに、君主

がしばしば改宗する。イギリスなどは、ピューリタンになったかと思えばカソリックになったり国教会になったりね。これでは大量の宗教難民が発生せざるをえない。—— その難民たちがアメリカを目指したと。

橋爪 そのせいでアメリカは、いろんな宗教のモザイクみたいになりました。同じ信仰を持つ人たちは固まって暮らすからね。今はゴチャゴチャになってるけど、それでもクエーカーはペンシルヴァニア州、ピューリタンはメイン州、ルイジアナ州だったからカソリックとか、宗派ごとに集まっていた。でも彼らは、イギリスから独立するために、信仰の差を超えて力を合わせて闘い、アメリカが生まれた。もしも、そのときヨーロッパのように、何かの宗教をアメリカが掲げようとしていたらどうなる？

—— 州どうしの宗教戦争になっちゃうでしょうね。

橋爪 だからアメリカでは、国家と宗教の関連を絶ちきる必要があった。そうでなければアメリカはバラバラになってしまう。だから、アメリカが掲げるべき建国の理念

はただひとつ、「宗教の自由」しかない。国家は個人の信仰にいい悪い関知しない、人々が何を信じようとする自由——アメリカが憲法にうたうべき理念は、まずこれですよ。長くなったけど、これが「国家があると自由が増える」という考え方の意味なのです。

憲法は国家の自己主張である

—— じゃ、アメリカのいう「自由」って、宗教の自由のことだったわけですね。

橋爪 そう。それに憲法も、「国家」というもの自体も、今まで話したように、キリスト教の歴史から出てきた考え方と言える。—— でも、それじゃ、やっぱりアジアに住むぼくたちには関係ないですね。

橋爪 だからアジアやアフリカの国々で、憲法が機能しにくいのです。形だけ欧米の国家のマネをしても、マネだけで看板倒れの「劇場国家」になりがちだ。日本人も憲法というものがどうもよくわかっていない。もし、経験からしか学べないんだとすれば、日本人も宗教戦争を二百年ぐらいやるしかないですね。「幸福の科学」と「統一教会」

と「オウム真理教」と「創価学会」なんかの四派ぐらいに分かれて。でも、わざわざそんなことするのはばかばかしい。

—— さきほどからお話を伺っていると、国家ってやつは自己主張が強いなあと思うんですよ。アメリカは「自由」っていう理念を、ヨーロッパの王国も「神の意志」ってやつを掲げてますよね。日本国憲法の前文にも「崇高な理想」とか「国際社会においても名譽ある地位を占めたい」とか「青年の主張」みたいな言葉が並んでるんですけど、なんでそんなに「崇高」な目的を持たなきゃならないんでしょうか。特に主張もなく、なんとなくある国というんじゃないんですか？

橋爪 そう思うのはね、日本が孤立した島国だからですよ。

—— と、いますと？

橋爪 国家っていうのは、他の国家があるから存在するんです。人間の歴史から考えると、まずいくつかの部族があって、そのひとつが他の部族を傘下に治めていって、国ができあがるでしょ。次にそうしてできた国どうしが隣り合

わせにあれば、ケンカになりますよね。そして互いに相手をつぶしてしまおうとする。そのときにできたのが「国家」というアイデア。「われわれは『国家』という存在であって、勝手に攻め込んでほしくない。なぜなら、それは神に保障されているからである」と自己主張するわけです。

—— 神に保障されているなんてどこからできたんですか？

橋爪 そのへんがキリスト教圏独特のフィクションなんですけど、ヨーロッパは陸続きだから、国家はそれぞれに神とか理念を掲げて存在理由を主張しなければつづざれちゃう。「国家」というアイデアと言ったけどアイデアというのはアイデア、つまりイデオロギーだ。すべての国家は、イデオロギー的存在なんです。別に共産主義とかじやなくてもね。何か理念を掲げないと国民をひとつに集めることができないのです。憲法はその理念を明文化したものである。—— すると、国家というアイデアは、他の国家の存在を意識したものでしかないわけですね。アメリカはどうですか？ 隣に對抗すべき国はありませんが。

橋爪 さっき言ったように、アメリカはヨーロッパのような宗教国家は嫌だということとできた国だから、ヨーロッパに對抗してる。というか、ヨーロッパの裏返しです。ところが日本は、四方を海に囲まれてるので外部の脅威なしになんとなく自然に国の形にまとまっちゃった。だから、「国家」は存在理由が必要だ」と言われてもよく理解できない。もうひとつの理由として、中国の影響がある。

—— 中国と日本の間には国としての対抗意識はなかった？

橋爪 中国というのは、中国人の考え方だと、国じゃないんです。中華というのは世界の中心という意味で、中国^{イコール}世界、中国人^{イコール}人間、なんだ。中国人というのは儒教の教養を持つ人のことで、民族とは関係ない。だから、朝鮮とか日本とかペトナムとかモンゴルとかは、中国に仲間入りできない野蛮な民族の集団であって、中国と対等の「国家」だなんて考えはまるでなかった。本当にレベルが高ければ、世界(中国)に入ってるはずなんだから。

—— でも、日本も儒教の教養は基本だっ

たですよ。

橋爪 だから、儒教の文化圏のなかでは、日本という国を本当に強く自己主張するっていう考え方は起こりにくかった。そもそも「天皇」という呼び名からして屈折しているわけだ。日本の王を皇帝と呼ぶと中国に怒られるから、遠慮して天皇と言うわけですが、つねに、日本は中国に対して下位にあるということ意識させられてきた。まあ、それでも日本人は「日本という国がある」と、思い込んできました。

—— なんの根拠もないのに？

橋爪 だから、それこそフィクションなんです。外敵に攻め込まれて「日本なんて国はない」と言われたことがないから気づかないだけで。「日本という国がある」というのはやはりフィクション、もしくはイデオロギーなんです。

憲法がなければ「国家」ではない

橋爪 ところが江戸時代の終わりに、ヨーロッパの国家どうしの覇権争いが日本にも押し寄せて来た。そのとき日本が取った選

択は、中国から一転して欧米の方を向き、彼らのマネをして「日本も国家だ」と宣言したわけです。植民地にされるかどうかの瀬戸際です。欧米の考え方を取り入れて

「国家」だと言えば、とりあえず対等に見てくれるから、強引に侵略されることはない。いっぽう、「国家」というアイデアをマネしなかった中国は欧米諸国に食い荒らされてしまった。

—— で、いよいよ明治憲法ですね。

橋爪 ところが「日本は国家だ」ということ以外に、憲法にうたうべき新しい前向きの理念なんか何も思いつかなかった。そこで「王政復古」という後ろ向きなスローガンを掲げて明治維新をすすめ、天皇をかっぎ出したんだけど、これがまずかった。日本土着のものだから、なんで彼が偉いのか、欧米に対して説明できない。

—— 万世一系っていつでも通用しませんしね。

橋爪 王国に憲法を作れば立憲君主制になるわけですが、立憲君主制っていうのは君主も憲法にコントロールされる制度、いわば天皇機関説なんです。これだと日本は

民主主義になってしまいかねない。それは困る、と思った明治政府は、天皇にだけは法律が及ばないという条文を書き加えることにした。

—— 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス、(旧憲法第三条)ですね。

橋爪 憲法は、王様の権力を規制するためできたと最初に言いました。この点から見れば、大日本帝国憲法はとんでもない欠陥憲法です。現にこれが原因となって、日本は侵略戦争に突き進んで行った。

—— 国家権力を規制するための憲法から「規制」の部分を取っちゃったから、暴走しちゃった。

橋爪 そこで戦後の憲法は、天皇が実権を持ってないように、「象徴」にした。これでやっと憲法らしい憲法になった。

憲法は日本人の宿題

—— で、護憲派も改憲派もなんか嫌だ、という最初の話に戻ります。まず護憲派の人ですが、彼らはよく「日本国憲法には戦争放棄と書いてあるから〇〇〇〇はいけな

い」という言い方をしますね。それが変だなあと。

橋爪 どこが変ですか？

—— それって、偉い作家が書いた本を引用して「この本に書いてあるから」と言ってるのと似てませんか？

橋爪 それは護憲派も、この憲法が自分たちで作ったものでないことを知ってるからだと思う。日本人自身が明治憲法を欠陥憲法だと思って、憲法改正運動をやったのが日本国憲法なら、みんな「私たちの作った憲法だ」と言い、その憲法に素直に自己同一化できるんだけど、それができない。「国民の総意に基づいて」と書いてあるけど、アメリカに憲法を直してもらったのはやっぱり事実だからね。これはね、成績のいい子に宿題を写させてもらったようなものなんだ。いい成績はもらえなかったけど、写した自分としてはどうも居心地が悪い。

—— あー、その感じわかる(笑)！

橋爪 じゃあどうすればいいかって言うところ……もう一回自分で宿題をやればいいんです。「実は写させてもらいました」とか、わざわざ言わなくてもいいですから、もう

一度自分で勉強してやり直すこと。それが、もう一回憲法改正することの意義だと、私は思います。

—— そうすると、結果として日本国憲法と、同じ答えが出るかもしれないね。

橋爪 同じ答えでも構わない。別に点数が前より増えるわけじゃないかもしれないけど、とにかく、もう一回やる必要がある。

—— では、今度は改憲派のほうですが、彼らはなぜか伝統主義っていうか天皇の好きな人たちが多いですが(笑)、もし本当に改憲したら、本当の意味で初めて国民の総意でできた憲法になるわけで、天皇もそれに従うわけですから、日本は真の国民主権になって、天皇の意味は今よりもさらに形骸化するんじゃないでしょうか？

橋爪 いや、天皇は形骸化したただの飾りものみたいになっていて、という状態こそが本当は日本の伝統なんです。「天皇親政」を建前にあげた明治維新のほうか、むしろその伝統から外れていたのです。この複雑な現代社会を、天皇ひとり「親政」できるわけがない。ほかの人が大勢手助けしなければならぬわけですから、「親政」と

言っても結局飾りものになります。天皇が好きな人びとが望んでいることの最大公約数は、天皇が国民の精神的なよりどころとして日本の伝統的なカリスマを保持することじゃないのかな。それなら今の憲法の精神とも矛盾しない。

神なき国に憲法は可能か

—— では、かりに改憲をするとしてしましう。さきほど「すべての国家はイデオロギ一的存在である」とおっしゃいましたが、ということは日本国民も自分の意思で憲法に掲げるイデオロギーを決めなければならなくなりますよね。そう言うとき「えーっ。めんどくせえ」って思うでしょうね。ほら、日本人って体質的にイデオロギーがきらいだから。かと言って国民が共有する宗教もモラルもないし。

橋爪 日本人の普通のインテリは、ものを考えていくと、とかく価値相対主義になるんです。たとえば「キリスト教もイスラム教もそれなりに高度な宗教です」なんて言う。そう言うのは簡単だけれど、今、冷戦

が終わって世界各地で民族や宗教が対立抗争して居るでしょ。キリスト教徒とイスラム教徒が戦争してるところに割って入って、そんなセリフ言っても両方から怒られるのがオチです。

—— けど、どっちかにつくのも嫌なんです。

橋爪 だから「どっちもそれなりに正しい」なんて言っていないで、もうひと皮むけて「どっちもダメだ」って言って、その対立を乗り越える新しい価値を提案しないとダメなんです。そこまで自分を追いこんで行ったときに、日本が掲げるべき理念っていうのは見えてくるんじゃないか。それは、特定の宗教に縛られなかった日本にだけできることなのかもしれない。

—— 日本独自の理念を探すんですか、それはけっこう重たいですね。

橋爪 重たいけど、それをやらないと憲法改正はできない。憲法改正をしないと、日本人は真の意味で近代の間にはなれない。それは、僕らみんなが国家の主人になるということですよ。でも、かつたらないなあ。みんなそんなことと関係なくヘラ

ヘラいかげんに暮らしてたいだろうと思えます。

橋爪 昔のように島国のなかでなあなあでやってるうちはそれでもいいでしょう。その場合、ムラ意識みたいなものが宗教や理念と似たような役割をしてたんだろうけど、もう今の時代ではそうはいかない。よその国との関係なしに、日本人の生活したいが成り立たないんだから。外国人もどんどん入ってくるのにムラ意識で対応してたら、差別問題になるでしょうね。

—— では、もし憲法を改正するとしたら、国家の理念としてどんなことを掲げるべきなんでしょう？

橋爪 さっき言ったように、宗教的でない日本人の特性を生かして、宗教戦争や民族紛争の解決に向けて最大限の貢献をするというのが一つのアイデアだと思う。日本は、いろいろ国際的に貢献できる能力があるわけだ。エレクトロニクスなどの工業力とか、それから資本、技術、人的資源とか。そういうものが相対的に豊富で、しかも独自に動けるわけだから、世界の国々をつなぐのに大いに役立つはずだ。

憲法をいらなくするための憲法

—— でも、世界をひとつにしようとする理念は、延長していくと国家をなくすること、国家の存在理由としては矛盾しませんか？

橋爪 世界中から国家がなくなる日を目指す国家、というのがあっていいんです。たとえば、共産主義もインターナショナルなものでした。社会主義革命を世界中に広げて、地球がひとつの国になったとき共産主義社会は初めて実現するんだから。実際はソ連みたいに一国社会主義になっちゃったけど、それにイスラムもインターナショナルです。イスラム教の始祖ムハンマド（モハメッド）が生まれたときのアラビアはいろんな宗教や部族が入り乱れて戦争ばかりしてた。そのときムハンマドに「唯一神のもとに世界を統一せよ」と神から啓示が下った。その神の言葉を書き留めたのがコーラン。これは神が自ら下した法律でもある。これがあるからイスラムには憲法はいらない。それに、もともと世界をひとつに

の話ですよ。でも、それを理念として掲げるのは、そんなに無茶でもない。たとえばアメリカが掲げた「自由」という理念は、今にいたるも完全に実現してはいないけれども、アメリカっていう国ができたおかげで、十九世紀、二十世紀はそれまでとはずいぶん違った時代になったでしょ。そういう意味では、二百年かかろうと、五百年かかろうと、その前にある理念を掲げておくっていうのは大事なことだ。

—— そうすると憲法っていうのも、国家の消滅とともに、いつかはいらなくなるわけですよ。

橋爪 うん、でもその前に、日本はさっき言った宿題をやらないとね。確かに憲法っていうのはキリスト教から発生した西欧近代主義特有の考え方だから、日本人には合わないと言ってしまうばそれまでだけど、それじゃ、日本人は今までいろいろ西欧のマネをしてきましたけどやっぱりカッコだ、で、本当の近代人にはなれませんでした、って言うてるのと同じことになる。とにかく、いったん欧米人の発想を引き受けられないことには、それを乗り越えるも何もないもの。

だから問題なのは、憲法そのものじゃないんです。憲法を自分のものにできるだけの「近代人」になれるかってことなんです。学校の授業と同じで、「近代」という宿題をサボったまま次の段階に進むと、ついていけなくなっちゃう。(構成編集部)

するための宗教だから、本当は国家もいらさない。昔、アラブ連合というのがあったけど、あれは、コーランによれば国境があるのはおかしい、といって合体してしまっただけです。実際には、またバラバラになっちゃいましたけども。

—— 日本もまた国家の消滅を目的とする国家たらんと。

橋爪 そのために、暫定的なまとまりとして日本という国家があるが、この国家は、世界的な平和が実現した段階では、いつ解体しても構わない。そう言えればいい。

—— 国家がなくなる日なんてくるんですか？

橋爪 もともとキリスト教徒みたいに、ちょっと考え方が違っただけで殴りあいの喧嘩になるような人たちがいるから、国家ができたんであって、このまま経済や情報、人間の交流が進んでいけば、欧米的な近代国家の存在理由がどんどん薄れていくのは避けたい。むしろ国家なんか、邪魔になっ



あたえられた王国

ジェネレーションXはどこへ行く?

語り・橋爪大三郎

中心となる価値を欠いた
オタクやカルトが
X世代を分裂させている

太陽族、安楽世代、団塊の世代……。
戦後を、いくつもの世代が通過していき
ました。いま話題にしたいのは、新人類
より若く、ファミコン世代より年長の谷
間の世代ですが、なんと呼んだらいいの
か適当な名前がないので、とりあえず
「世代X」としておきます。

世代とは何か?
世代がたまたま若者と違ふのは、目印ヘタ
グンがついていること。目印のおかげで
「ある時代を共に生きた我々」という世代
意識が生まれ、独自の流行や世代文化を
生むようになるのです。

世代は、相反する2つの力学(結合と
切断)のバランスの産物です。
「結合」とは、仲間がまとまること。若
者は、まだ十分成熟してないけれど、
まとまればパワーになることを知ってい
る。彼らがまとまるのは、特有の自立願
望の現われです。

ただ同時に彼らは、自分たちが何と違
っているかをはっきりさせたい。特に、
上の世代との違いを際立たせたい。そこ
で、なにが新しいものや大人が眉をしか
めるようなものに愛着を示して、自分た
ちの存在をアピールする。これが「切断」
です。ファッション、音楽、独特の言葉
づかい……。これらの文化的アイテムは
彼らの小道具であり、「結合」と「切断」
を標する指標なのです。

このような世代の本質に照らしてみ
ると、「ジェネレーションX」の若者は、ず
いぶんしんどいのではないかなと思っ
てみる。

ます。世代のアイデンティティ確立に苦
しんでいる。彼らより上の世代の「新人
類」は、ニッポン株式会社を背に向けて
個人生活を大事にして、ファッションなん
かもぐんとアカ抜けて美容院に行きまじ
めるなど、それなりに特徴を出せた。と
ころが遅れてきた彼らは、もうその手が
使えない。かといって、ファミコンが流
行ったのは、彼らが中高生になってから
当時の小学生たちが「ファミコン世代」と
なって、彼らを追い上げていく。2つの
世代にはさまれ中途半端で、名前も付け
てもらってない20代前半の人びと。これ
が、日本のジェネレーションXなのです。

この世代の人びとがしんどい理由は、
「切断」がうまくいかないからです。適当
な文化的アイテムがない。ロックは父親
どころか、お祖父さんだつて聴いてたか
もしれない。ファッションも、いま流行
りのルーツをたどると60年代だつたりす
る。感性にしても、テレビや漫画なら親
たちのころからもうあつたので、そんな
に差がない。前の世代とまったく連続
していて特徴がないのが、この世代の特
徴です。

しかも、「団塊の世代の先回り」が、こ
れに輪をかけている。

どういふことかと言いますと、本当な
ら切断の対象となるはずの大人たちが、
いやにものわかりがいいんです。親たち
がビートルズの注釈をしてくれる。服で
も食べ物でも乗り物でも、こういうのが
あると面白いだらうと、行く先々、店を
開いて待っているのは団塊の世代なん
です。こうまで先回りされたのでは面白
くない。

じゃあ、「結合」のほうは成功したかと

報へのこだわりで成り立っているため、
上下の世代に対してでなく同一世代の内
部で分割線をひいてしまひ、自分たちの
世代をすたすたに分裂させてしまふ。

こういうオタクやカルトはしばしばか
しいのですが、そのことに自分でも気が
ついていて醒めているもの、特徴です。あ
る方向にのめりこみながらも、引き返す
タイミングを測っている。暴走しながら
来年は足を洗おうと決めていた暴走族
みたいですが、昔だったら、途中で引き返
すのは「挫折」で、どんどん進んで行く
のが正しかった。行つたつきの人が、過
激派にもかなりいたでしょう。でも団塊
の世代と違って、彼らはそこまで自分の
価値観を信じ切れないんです。

情報や自由を、また十分に
使いこなしてないだけに
大きな可能性を秘めている

ジェネレーションXの人びとには「ノ
ーマル幻想」があるみたいです。

これは、中流志向とはちよつと違ふ。現
に資産格差があつても、ライフ・スタイ
ルはそんなに変わらないうえ、その表
面のところを彼らは信じていて、自分
はそれから外れない、外れちゃいけない
みたいと思ひこんでいる。よく考えれ
ば、根拠のない幻想です。でも、生活の
面でも、もの考え方でも、極端を嫌い、
ノーマルであることを志向する傾向が
強い。

となると、ある方向にのめりこみつ
なしという人がいなくなります。その結
果この世代は、八方ふさがりのタコ壺
みたいな感じに襲われる。これでは開放
感がないから、世代全体にフラステー
ションがたまり、文化的ヒーローも出
なくなると思ひます。なんかで優勝したり
賞を取る人は当然出ますが、その人が世
代を代表する文化的ヒーローになるか
という、そういうことは少ない。

「ノーマル幻想」は、一見無害に見え
ますが、問題が多いと思ひます。

戦後、50年近くが経ちました。民主
主義の予行演習も終わつて、いよいよ民
主主義で生まれ育つた第二世代の時代
です。団塊の世代がもの心ついたころの社
会は余裕がなく、若者の側からオルタナ
ティブを出せばすぐ喧嘩になりました。そ
うこうするうちに、体制側もいくつか、選
択肢を用意するようになった。最近
は、誰か誰かが管理するたために体
制を作っている、という仕組みはど
んどん壊れている。憲法改正、PKO、コ
メの輸入自由化など、目の前の問題を例
にあげても、いままでみだりに対立した
グループが押しくらまじゅうしてみても
解決しません。

社会の力学が変化し、手続きを踏めば、
制度のかなりの部分が変わる可能性があ
つた。これまでになく、ソフトな時代
で

いうと、こちらも低調。理由は、価値相
対主義が公認されてしまったからです。
ついでの間まで、ベルリンの壁をば
世の中には動かせない壁があつて、右
左、北と南のような対立を形成して
その反対側に移れば、一応、自分た
ちのグループが作れたんです。でもベル
リンの壁が崩壊してから、個人で価値観
が違うのは当たり前、どれだつてあり
だという世界になった。少々のこと
で、大人は驚いてくれない。同じ世代
でも価値観が多様化し、これまで
に特定の価値観にコミットメントして
形成をはかるなんて、もう不可能な
です。

団塊の世代のころだったら、政治とい
う場所に飛び込めば、社会党や共産
のやらない過激派の世界があつた。金
にならない前衛芸術をやつてもよ
新宿でシンナーを吸つてもよかつた。
それで世帯形成ができたんです。と
ころが、反社会的だと言つてもえ
る。一部の新宗教ぐらゐのもの。統一
教会に入れば、親も心配するしマス
コミも叩いてくれますが、まさか
ジェネレーションX全体が信するわけ
にもいかない。

というわけで、団塊の世代の先
回りをはねのけることもできず、自分
たちの世代に独自の価値を発見する
こともできない。この世代の若者た
ちの多くは、オタクつぽく、カルト
的なものにならざるをえませんが、
カルトは本来、特定の教義や価値観
を共有する集団という意味ですが、
ものからほど遠く、中心となるべき
価値観を欠いたまま、「これだけ知
っている」というゲームにならざる
をえない。オタクやカルトも「結
合」と「分離」のゲームなんです
が、微細な違いでローカルな情

す。この状況に、ジェネレーションXは、
どのように応じていくのか。彼らは
価値観にこだわりがありませんから、
外の価値観との間に、論争や対話
が成り立ちにくい。民主主義の機
能である、チェック&バランスが
きちんと働くかという心配が
あります。

反面、日本人が本当にクリエイ
ティブな仕事をするのは、この世
代からあつたとも言える。彼らには
情報が行きわたつていて、真似と
真似でない本物と区別できる。ま
た、自由もあるから、やろうと思
えばなんでもできる。自分の手
のなかにある情報や自由を、また
十分に使いこなしてないだけで、
そのことに気付けば、彼らは大
きな可能性を秘めていると思ひ
ます。彼らがおとなしい羊の
群れでなく、個性ある狼となつ
たとき、はじめてXに名前が与
えられるのではないでしようか。
(構成・温水ゆかり)

(世代)は「結合」と「切断」の力学から生まれる。
「新人類」と「ファミコン世代」のはざまに呻く「ジェネレーションX」は、その両方に失敗したまま、
この「ソフトな社会」を彷徨いつづけるしかないのか――。

● 団塊 Jr. の生活観 (%)

	かなりあてはまる	あてはまる	あてはまる計
自分の将来は明るいと思つている	18.4	45.9	31.2 4.5 64.3%
あまりガツガツやるのは嫌いで、気ままにのんびりやるほうだ	32.7	44.0	18.8 4.5 76.7%
平凡な人生がよい	14.3	35.3	33.5 16.9 49.6%

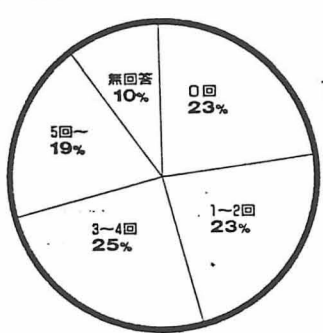
調査対象: 18-21歳の男女266人(1992年末現在)。提供・電通

● 自宅の近くに原発ができて仕方がない (%)

	そう思う	思わない
男性	27.5	72.5
女性	17.0	83.0

調査対象: 20-29歳の社会人100人(1992年)。提供・月刊「アクロス」

● コンビニエンス・ストアの利用回数(1週間)



● 超能力・超感覚への興味 (%)

	非常にそう思う	まあそう思う	あてはまる計
科学的力では説明できない神秘的なパワーは存在する	28.2	50.0	15.0 6.8 78.2%
死後の世界や霊の世界を信じるほうだ	18.0	39.5	29.3 13.2 57.5%

調査対象: 18-21歳の男女266人(1992年末現在)。提供・電通

1993-13-12/15

1993-13-13/15

結婚・出産、そして子育てがある 女性にとって、資格を取る意味とは？

はしづめだいさぶろう
橋爪大三郎先生(社会学者、東京工業大学助教授)

「女性の意識が変わり、社会が変わって、 次に必要なのは男性の考え方を変えていくことです」

“女性と資格”を考えていく上で、次の3点がキーポイントになると思います。

①まず、昔はデキル女性とキレイな女性は、別なタイプでした。しかし最近では、デキてもキレイな人が目立って増えてきている。それはなぜか？

②次に、女性が“資格を取って社会に進出”するのは“資格なしで社会に進出”するのとは、どこが違うのか？

③そして、女性が資格を取ったとしても、ほかの問題をどうすればいいのか？
では、この3点をそれぞれ詳しく見ていきましょう。

最近、デキてもキレイな女性が目立って増えてきている。 それはなぜか？

～卒業アルバムがお見合い写真だった頃～

昔は、一流大学には美人はいない！という通念がありました。どうしてかという、かつての女性のライフコースは、“お嫁に行くこと”が非常に重要なことで、社会に進出することはあまり期待されていませんでした。そこで、一流女学校の卒業アルバムは、お見合い写真の代わりになっていたのです。そして、成績が良くて気立てのよい美人には、お見合いの話があめあられと降ってきて、卒業前に婚約したりする人がたくさんいたわけです。

では、そうでない人はどうか。親が「ウーン。お前はねえ、やっぱり勉強で身をたてたほうがいいよ」ということで、苦学をして医者になったり学者になったりしました。

～女性の意識と社会のニーズの変化～
ところが最近、頭が良くキレイな人がとても増えてきています。これにはふたつ

の意味があって、キレイな女性たちがキレイであるということ。「結婚できるから大丈夫だ」と思わないで、勉強を続けているということ。そして、デキル女性の総数が増えて競争も激しくなり、「同じ能力があるのならキレイな女性を」ということでテレビなどで採用されて活躍していること。ある種、差別だと思えますが…。

こうした現象の転換期は、80年代の初め。四年制大学へ女性が進学することは、昔は就職しないということの意味していました。しかし、80年代に入って、大幅な人手不足と企業のハイテク化などで、女性を戦力として考えるようになって採用動向が変わってきたのです。



女性の“資格による社会進出”と“資格によらない社会進出”とは、 どう違うのか？

～女性にとっての“総合職”と“資格”～

では、デキル女性たちは、どうやって生きていくのか。当然、自分の能力や自分の修めた学問・技術を活かして仕事をしたい。そうすると、就職しなければならぬ。社会に出なければならぬ。職業を選ばなければならぬ。ところが、従来女性のために用意されていた職業は、補助的な仕事が多かったから、新しい分野を開拓していかなければならぬでした。

そこで、ふたつの可能性があります。ひ

とは、従来男性がやっていた仕事の中に女性も入っていくということ。たとえば、男女雇用機会均等法以降の“総合職”というのがこれです。

もうひとつが、“資格”です。ある水準以上のライセンスをもらえば、男女に関係なくその仕事ができる。そうすると、男社会に適応して、男性の部下になって、男の同僚と競争していくということをしなくても済みます。お茶汲みもないし、肩たたきもない。それから、自営業ですら自分の都合に合わせて休むこともできます。資格は、わざわざ男社会の中で苦労しなくても、女性が社会進出していけるという有利な点が多いのです。

～女性は覚悟を決めて二者択一する～

そこで、デキル女性が増えてきたときに、彼女たちが考えるのは総合職でいこうか、それとも何か自分だけの技能を身に付けて資格を得ようか、資格を得ないままでもプロフェッショナルとして生きていこうか、という二者択一なのです。

たとえば大学などでも、建築学科に進んで建築士になろうとか、学位を取って学者として生きていこうという女性たちは、男性に比べて根性が入っている。「この仕事は天職だと思って一生やっていくんだ」という覚悟があつてきています。男性の場合は、どこかふらふらしていて、「理科系にきたけど、証券会社に就職しようかな」と考えたりしている。女性はそういったことは、もう高校のときに考えています。だから、今はまだ覚悟がないと女性は専門職になれない時代ですが、いったん覚悟を決めれば根性入れて勉強しますから資格を取りやすい。そういう意味からも資格を取ることとは、女性に向いていると思います。

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう)
昭和23年、神奈川県鎌倉市生まれ。昭和52年、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。〈言語〉派社会学の樹立を目指して執筆を続け、性・言語・権力の3つを説明原理とする「記号空間論」の構想を展開しつつある。東京工業大学助教授。



女性が資格を取ることで 問題をどうすればいいのか？

～“つりあっている”結婚が難しい～

資格を取得すれば、夫に依存したり男社会に妥協したりしないで生きていける。それは、女性の自立にとって一番良いことです。しかし、これが裏目に出てなかなか人生設計が上手くいかない場合があります。第一に配偶者を見つけるのが難しい。日本の通念では、夫と妻を比べると夫の方が少し年上で、収入や社会的地位や学歴もちょっと上なのかなバランスが良いという感覚が何となくあります。“つりあっている”というのはそういう意味で、“まったく対等”ではありません。たとえば、収入は夫の方が多か学歴は妻の方が上だからちょうどいい、とはあまり思わないわけです。そうするとどうなるかという、良くできる女性ほど、もっと上の男性を見つけなければならないという周囲の期待が生まれてしまいます。下手をすると、本人もそう思うしまう場合がある。そうすると、相手はなかなか見つからない。

それを男性の側から見ると…。今、競争の激しい社会の中で、男性たちは働き過ぎです。そんな男性たちが、そのデキル女性と、OL2年目で「そろそろやめようかな」と思っている家庭の主婦型の人と、どちらを奥さんにしたいか。いろいろあるだろうけど、「俺も疲れているので、家に帰ったらくつろぎたいので」と言って家庭の主婦型の人を選ぶ男性がまだまだ多い。こうした男性の考えは、これから変えていく必要があるとは思いますが。

～子供を産むのが負担になっている社会～

しかし、その結婚難をクリアしても次の問題があります。それは“子供”です。子供を産むと、そこから引き継いで育児などの負担も集中してしまうので、キャリアが途切れてしまう。たとえ産むとしても2人ほしいところを1人で我慢したり、1人産むところを産まないで我慢したりで、全般に子供の数が少なくなってきています。子供を産むのが負担になるというのは、女性にとってはとても困る事です。

では、たとえばアメリカではどうか。社会保障は日本以下ですが、ベビーシッターなどの補助労働をコミュニティーが支援するというシステムがあります。しかし、日本は家も狭く、完全雇用だから誰もそういうことはしませんし、そういう習慣もありません。見ず知らずの人に契約で預けるといいう考え方がありませんでした。

日本にベビーシッターの文化が合わないのであれば、それに代わるような新しいシステムを社会が考えるべきでしょうね。

こういう困難を覚悟の上で、「今まで人が進んでない道を進もう」「自分の可能性を試してみよう」と考える女性が増えていくというのは、頼もしいことです。これからの男性は、そういう女性に魅力を感じないようでは駄目だと思いますよ。

～過渡期の後に問われる女性の真価～

こうして見てきたいろいろな問題は、今が過渡期だからなのです。やがて、女性が社会に進出することが当たり前になって、本当に“つりあっている”結婚をして、子供を安心して産める時代が来るといいますし、そうなっていくかなければなりません。

その時、女性の真価が問われることになります。資格を得た女性たちには、そこに安住せずにライセンスを得た後も、専門分野における技量を積めるように修練してほしいと思います。…これは、男性にも全く同じことが言えるのですけどね。

※文責、ネボック編集部

突貫インタビュー

ようは何だ

1993-13
14/15

橋爪大三郎の巻(第1回)

子どものころ、民主主義のことをなんて教わった
だろうか。民主主義とはみんなで平等に暮らすこと、
だったろうか？ 民主主義こそ最高の政治制度だ、
と言ってきた橋爪大三郎さんに、なぜそう考えるの
か話を聞いてきた。

—民主主義は、なぜ最高の政治制度なんですか。

こんな話があります。頭をぶち割る代わりに、頭を数えるのが民主主義である、と。例えば、人間が10人いたとします。当然のことながら、十人十色の考え方や利害関係が出てきますよね。こうなると、みんな別々のことを考えているわけですから、何か物事を決めなければならなくなったとき、なかなか意見がまとまりません。では、どうすればいいのか。1つは、自分を除いた残り9人の頭をぶち割ってしまえばいいわけです。実際にぶち割らなくても、ぶち割るぞと脅して黙らせる。そうすれば、10人いようと自分1人の意見を通すことが可能です。これが1つの方法。

民主主義はそれとはまた別の方法で、脅して黙らせる代わりに自分の考えをみんなにしゃべらせます。もちろん良い考えも悪い考えも出てくるんですが、議論を通じて悪い考えは徐々に言い負かされ、より良い考えが残っていくだろうと民主主義では考えるんです。で、これ以上言い負かされないような考えがいくつか最後に残ったとき、それぞれの考えの支持者を数え、数の多かったほうを全体の結論にします。その決定に全員が責任を持って従うというのが、民主主義のシステムなんです。

もし民主主義を否定すれば、必然的に、頭をぶち割るぞと脅して物事を決めていくような制度になっていきます。頭をぶち割るほうにしてみれば、そのほうが物事を決めるのに都合がいいわけですが、残りの人たちは自分の考えを自由に言うことができなくなってしまいます。ですから、みんながなるべく満足する制度としては、民主主義がいちばん優れているわけです。

—民主主義のもとで、個々人はどのような行動規範が求められるわけですか。

まず議論すること、次に多数決で決めること、そし

て決めたことにはみんなが従うこと。この3つです。議論をせずに多数決で決めても民主主義とは言えませんし、多数決で決めたことに個々人が従わなければ民主主義にはなりません。民主主義のもとでは、自分に都合が悪かったり決定に賛成できなかったりした場合でも、決まったことには従わなくてはなりません。当然、ストレスもたまります。ですが、平均してみればほかのやり方よりも全体的にみんなの満足感が高くなるんです。

—民主主義は日本でどのように受けとめられているのでしょうか。

日本で民主主義は、主義という文字が付いているために、マルクス主義のような思想であるかのように誤解されています。確かに広い意味では思想ですが、その中に社会民主主義だとか福祉を重視するだとかの思想を含み持つもっと大きな政治の枠組みなんです。個々人にとってはこの社会の成員としての行動様式、マナー。これを思想だと誤解しているから、本を読んだりしなければ理解できないとか、一般国民には関係がないとか思われています。

第二の誤解は、民主主義とみんなで仲良くすることが同じだと思われていることです。日本人のものの決め方というのは、対立がなくてみんな同じ意見になるのが理想とされていて、それがしばしば民主主義だと誤解されています。ですが、それは民主主義とは全く反対の考え方です。民主主義は、みんな同じ意見になればよしとする制度では決してないのですから。

(次号に続く。聞き手は本誌：石島裕之)

橋爪大三郎さんは、1948年鎌倉市生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在東京工業大学助教授。著書に「冒険としての社会科学」などがある。

ようは何だ

橋爪大三郎の巻(第2回)

1993-13
15/15

誤解されたままの、民主主義。橋爪さんは先月、そんなことを話してくれた。それにしても、どうして日本では、橋爪さんの話す民主主義の原則から離れた所で物事が動いていくのだろうか? “民主主義”という言葉自体はありふれていて、何をいまさらって感じさえるのに。

—民主主義を自分の日常に引き寄せて考えたとき、実はどこかピンとこないところがあるんです。これは、私だけに限らないように思うんですが…。

問題は、社会に対するものの見方にあります。

平均的な日本人の場合、社会を同心円状に見ている。自分がまずあって、つぎに夫婦とか家族などの身内、それから親戚とか親しい友人、そこからまた広がって職場とか地域、そして村や町などがある、というふうで、さらに、日本というちょっと硬い膜があって、そこから先は茫洋と広がっている、と。

そして、それぞれの場にふさわしい行動様式があるのです。相手がだれであるかによって、日本人は対応が全く違ってきます。そこには人間に対する普遍的な概念がありません。もちろん人を殺してはいけない、という程度の観念はあるんですが、具体性に欠けているんです。

これは、他人に対して積極的にかかわろうとする方法論が欠けていることを意味しています。自分たちとは異なる人間(つまり他人)がいたる所に存在していることを、想定していないわけです。

日本人はまず、つき合う相手との仲にこだわるのですが、仲が良くなかったとしてもとにかく一緒に社会生活を営んでいくのが近代社会なんです。ここで重要なのは、仲の良くない相手から見れば当然自分も他人と思われていること。他人ですから、親切にしてもらえません。もし自分が他人に意地悪をしたら、相手から見たら自分も他人ですから、仕返しされてしまいますよね。そこで、他人に対しても親切にしなければいけなくなってきて、やがて、最低限こういう義務は守りましょうという法律が作られるようになります。その法律によって自分も相手も守られる。このようにして市民法が作られてきたわけですから、ヨーロッパやアメリカなどでは法律に対する信頼が非常に高いので

す。逆に日本の場合、トラブルが生じたときに人間関係で解決しようとするから、法律に対する信頼心が非常に低くなっています。

—そうした状況下で、日常的に個人はどのように振る舞っていけばいいと考えますか。

日常生活で、みんながいちいち代議士のように議論しなければいけないとは思いません。しかし、プロフェッショナルにはプロフェッショナルとしての倫理があります。例えば、普通の人はだれかの体に刃物を突き立ててどんどん切ってしまうおとは思いませんが、外科医にはそれが仕事です。嫌だと言っていたら、外科医なんてできませんよね。手術は、長い訓練を経てできるようになるわけですが、そうしたプロフェッショナルとしての信頼があればこそ、ほかの人は安心して手術をまかせているわけです。これではじめて分業がうまくいく。プロとはそういうもので、どんな職業であっても、例えば政治家でも、同じことが言えます。

日本の風土は言論によって事を荒立てるのを嫌いますが、それでも、明確な言葉によって争点を浮き立たせて政策決定を私にまかせてください、私にまかせてくれれば皆さんの悪いようにはしません、これこれこういう理由があるからです、と言えるような政治家が出てこなければならぬ。きちんとした政策を立案・立法化して、それを国民に分かりやすく説明する。これが政治家に本来必要な能力なのですから、そういう能力のある人が幅広く支持されていくように国民が協力していけば、日本はいまよりもいい状態になるのではないかと考えています。(聞き手は本誌:石島裕之)

橋爪大三郎さんは、1948年鎌倉生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在東京工業大学助教授。著者に「民主主義は最高の政治制度である」などがある。

ようは何だ

橋爪大三郎の巻(第3回)

民主主義をテーマに話を聞いてきた橋爪大三郎の巻も、これでおしまい。考えだすと訳が分からなくなってしまうような「社会」について知りたい、という人は、ぜひ橋爪さんの著作に触れてほしい。簡にして要を得た橋爪さんの諸論文から受け取るものは、少なくないはずだ。

ふだん、僕たちは、いったいどんなことを話題にして話しているだろうか。話す内容によっては相手になかなか話が通じなくて苦労した、なんて経験を持つ人、けっこういるのではないかと。相手がだれであるかによって、その話題が理解されるか否かが、変わってくる。ごく親しい間柄でしか通じない話もあるし、自分の町内でだけ交わされるローカルな話題もあるというように、話される内容によってどのくらいの人たちに理解されるか、その程度が違ってくるのだ。

それでは、より多くの人に共有されている話題といったら何だろうか。やはり、メディアを通して届けられるさまざまな情報だろう。映画しかり、イベント情報しかり。そういった中で、とりえず耳に入ってくるけどなんだかうとうしくって話題にするのはちょっとねえ、というのが「政治」ではないか。この「政治」に対しては、大別して2つの気分が混在しているように思う。テレビなどを通じて知る「政治」は、あちら側のこと。自分の生活がそれで変わるわけでもなし。これがまず第1の気分。かといって完全に無視するほどには、ふっきれてない(他人事と言っても、やはりどこかで自分の生活にかかわっているような気もするなあ)。これが第2の気分。「政治」に対するこんなとっかかりのない漠然としたままの気分が、少なくとも'65年生まれの僕にはあったと思う。

マスコミ大の「政治」でなく

こんなすっきりしない心情を引きずっていた僕に、「政治」について考えるときのヒントを与えてくれたのが、橋爪大三郎さんの「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)だ。僕にとって相当にあいまいだった「政治」を、簡潔な言葉で定義づけている。すなわち「政治」とは、「おおぜいの人びとを拘束してしま

うようなことがらを、決定すること」である、と。たしかに僕たちは、言い古されたことかもしれないけれど、独りでは生きていけない存在、いわば「共同生活を営む生きもの」だ。だからこそ、みんなを拘束する何らかの取り決めが生じるようになる。

それにしても橋爪さんはなぜ、「民主主義は最高の政治制度である」という、強い響きを持った言葉を表題としたのだろうか。たとえばその響きは、民主主義は僕たちによって生きられるべきものだとする、本書のはしがきでも聞き取ることができる。果たしてそれは、「政治」に対してあいまいな手つきしか持ち得ていない僕と、どこかで切り結ぶことがあるのだろうか。民主主義における行動規範を、「まず議論すること、次に多数決で決めること、そして決めたことにはみんなが従うこと」(当欄12月号記事)の3つを挙げたうえで、これが日本ではまだ根づいていないという橋爪さんの指摘は、僕に、たしかにそういった状況はあるなあといったたぐいの納得をもたらした。

それは決して、「政治改革」といったメディアを通してあちら側からやってくるような事柄からではなく、むしろ仲間うちの関係でこそはっきりと見えてくるような質を持ったものではないか、と思う。さらに言えば、メディアから伝達されてきた「政治」にのめり込むことで、逆に足をすくわれてしまう可能性だってあると思う。マスコミ大の「政治」だけが「政治」じゃないということ。それは、橋爪さんが民主主義の前提は、「人間一人ひとりが自分の生き方を考え、つきつめ、決してそれを他人に預けないこと」(「民主主義は最高の政治制度である」)だと言ったことと、地続きだ。最終的に僕たち一人ひとりが、民主主義やいろんな事柄に対してどんな態度を取るにせよ、このことだけはたしかに言えるんじゃないだろうか。

(編集部・石島裕之)